

就職やキャリアアップを目指す人に必要な知識や技術を教えるポリテクセンター富山（高岡市八ヶ）は7日、同施設で報道関係者向けの体験会を開いた。11月の「人材開発促進月間」に合

わせて実施し、AR（拡張現実）技術を活用した溶接のシミュレーションを用意。最新機器の利点や習得方法を探るため、記者が初挑戦した。さて、結果やいかに。（倉谷亘）

本紙記者 ポリテクセンター富山で溶接体験



体験の結果を数値化して説明する指導員（中央）
＝ポリテクセンター富山

ポリテクセンター富山は職業訓練などを手がける施設。本年度は、県内で求人が多い溶接のほか電気工事やプログラミングなど8コースを設け、123人が受講している。

体験したのは、溶接工を目指す「テクニカルメタルワーク科」で使うAR溶接シミュレーター。受講者は溶接とは縁のない仕事をしてきた人が多い。実技の前

に、危険のないARで注意点や心構えなどを確認できる。これなら、いろいろと安心だろう。

シミュレーターは、溶接に使う「トーチ」や「遮光面」にそつくりで、重さや形はほぼ本物。ずっしりと重い遮光面を装着すると、中の小さなモニターにAR処理された映像が映る。映像は鮮明で、目の前にあつた緑色のワークシートが銀色の

ARが上達アシスト

鉄板にさっと姿を変えた。

この日は横一直線の溶接

と実際と同じようにトーチ

の先端が真っ白に強く輝き始めた。ワークシートから少しだけ浮かせながら、

トーチを移動させるのが実

に難しい。うまくいくだ

ろうか…。

そんな中、驚いたのがAR処理された映像だ。自分の手の動きにほぼ遅れるこ

となく、作業の様子が目の前に広がる。さらに、「模範

レーターの強みは「成績の数値化」と「危険がないこと」だ。

ポリテクセンター富山の担当者によると、溶接は感覚に頼る部分が大きく、改善点をどのように指摘するかが指導員の課題だった。数値化したことで受講者と改善点を共有しやすくなり、映像を見返しながら指導できるようになった。

改善点数値化 指導しやすく

危険性がないため、ハローワークなどの説明会でも活用でき

熟練者の技を体感できることも利点だ。実際の溶接は光が強く目に悪影響を及ぼすため直視できない。シミュレーターはこの弱点も克服し、受講者の学びが深まる。

ARを活用したシミュレーターの強みは「成績の数値化」と「危険がないこと」だ。

ポリテクセンター富山の担当者によると、溶接は感覚に頼る部分が大きく、改善点をどのように指摘するかが指導員の課題だった。数値化したことで受講者と改善点を共有しやすくなり、映像を見返しながら指導できるようになった。

ARシミュレーターは、今年は受講者数が増加傾向で、担当者は「AR体験の効果があるかもしない」と話す。

解答となる溶接場所やトーチの傾き、動かす速さなどがリアルタイムで画面に映る。それに自分のトーチを重ねれば、上達が早そうだ。この映像は別のモニターにも映し出され、指導員のアドバイスを聞くこともできる。至れり尽くせりだ。

結果は、機械が項目ごとに採点して数値化する。トーチの傾きが終始一定で良かったといい、90点満点で50点。感覚ではなく客観的な指摘は分かりやすい。点数は思ったよりも低かったが、受講者の中では高い方だという。もちろん、こわもての親方や先輩から「体で覚えろっ！」と怒鳴られることもなかった。